

論文

愛知大学経済学部英語授業の改善

— 習熟度別クラス編成の2005年度実施とCALL導入 —

三川克俊 早川 勇

要 旨

愛知大学経済学部では、英語の授業改善の一環として2005年度より習熟度別クラス編成を実施し、アルクのネットアカデミーによるCALL (Computer Assisted Language Learning) を導入した。習熟度別クラス編成は現在、全国の大学（短大を含む）の60パーセント以上が実施しており、CALLを授業の中心に据えているところは少ないものの、急速に増えている。本稿では、習熟度別クラス編成を実施するまでの経過と問題点、実施後の課題などを検討する。

キーワード：英語教育、習熟度別クラス、プレイスメントテスト、成績評価、CALL

本学経済学部では、全国の主要大学と比較すると遅ればせながら、英語の授業改善の一環として2005年度より習熟度別クラス編成を実施し、アルクのネットアカデミーによるCALLを導入した。習熟度別クラス編成は現在、全国の大学の60パーセント以上が実施している。CALLを授業の中心に据えているところは少ないものの、急速に増えている。近隣の愛知淑徳大学などでは、すでにTOEICをプレイスメントテストとして採用し、習熟度別クラス編成を行っている。習熟度別クラス編成を実施するまでの経過と問題点、実施後の課題などを検討したい。

従来、経済学部では基本共通教育科目として、文学部と同様に1年次4単位（科目名：基本英語2単位、口語英語2単位）、2年次4単位（科目名：英語講読2単位、総合英語2

単位)の英語を必修としてきた。しかし、入学時における学生の英語力には大きな格差が存在しており(主として経済学部)、多くの学生が再履修を余儀なくされている現状を鑑みて、経済学部では2003年に1年生全員を対象に英語授業に関するアンケートを行い(付属資料1参照)、その結果を踏まえ、豊橋外国語担当者会議において、習熟度別クラス編成を文学部、経済学部両方で2004年度4月より実施することに決定した。しかし、その後文学部教授会において、習熟度別クラス編成の是非をめぐり、さまざまな議論が行われ、結局この案は否決された。その後、文学部より、独自の英語授業改革案が提出されたことにより、経済学部英語授業の改革案に基づき(付属資料2参照)、2005年度4月より経済学部単独で習熟度別クラス編成を実施することとなった。この理由としては主に、文経共通科目としての性質上、学生の専攻や興味、能力が異なる文学部と経済学部の混合クラスがかねてより存在していたために、文学部と経済学部を分けてのクラス編成を望む声が英語担当教員の間で強かったためと思われる。

実施にあたっての問題点1：時間割の調整

習熟度別クラス編成を実施するにあたっての最大の問題点は、第2外国語との時間割調整であった。従来週2回の英語クラスのいわば裏番組として自動的に第2外国語のクラスの時間割が組まれていたが、英語を習熟度別クラス編成にすることにより、英語および第2外国語をまったく別個に編成し、時間帯をそれぞれ固定しなければ時間割編成が不可能となる。すなわち、特定の曜日や時間帯に教員を配置せざるを得なくなり、非常勤講師に依存する割合の高い愛知大学としてはこれが最大の問題点となった。時間割編成に関しては、教務課事務局に何度もシミュレーションをお願いし、その結果、1年生のネイティブスピーカーによる口語英語のクラスは、月曜の1, 2時限に固定し、日本人教師による基本英語のクラスは木曜の1, 2時限に固定するという結果となった。

問題点2：プレイスメントテストの実施

その他の問題点としては、プレイスメントテストの実施からクラス編成までの時間的余裕がほとんどないことであった。当初、TOEICなどの外部のテストをクラス分けに用いることも検討したが、成績結果が返却されてくるまでに2週間ほどかかるため、経済学部英語教員が独自に作成したテスト(マークシートによる)を使用することになった。しかし、それでも4月1日に一斉に試験を行い、その3日後にはクラス編成をしなければならなかったため、時間的余裕はほとんどなかったといえる。この点、三重大学などでは、プレイス

メントテストとしてTOEICのIPテストを用いているが、入学時の最初の2回の授業はこのIPテストの得点に応じたクラス編成でない「仮クラス」で受講することになっており、3週目以降、プレイスメントテストによるクラスで受講するシステムを採用している。この仮クラス制度は、本学経済学部でも今後検討に値するかもしれない。また、入学試験の成績にもとづいて、クラス編成を実施することも検討されたが、愛知大学の入試も多様化しており、かならずしも経済学部の受験生全員が同じ日に同一の入学試験を受けるわけではなく、また、推薦入学等により入学試験を免除されている学生も入学者400人中、100名以上存在するため、英語担当者が独自に作成したテストを用いて全員一斉に試験を行うことが一番現実的かつ公平であると判断された。

問題点3：クラス分けと成績評価の問題

プレイスメントテストの結果、クラス分けに関しては、提案どおり上級、中級、初級クラスの3レベルに分けるのが妥当と考えられた。経済学部1年生406名の総受験者の平均点は100点満点で43点、最高点は73点、最低点は7点という結果であった。このスコアにより、上級クラス約30名クラスを2つ、中級クラス約36名クラスを8つ、初級クラス約30名を2つの計12クラスを設けた。このうち、初級と上級クラスについては、教育内容に統一性を持たせるため、経済学部専任の英語教員が担当した。

上級クラスについては、クラス内で特に大きな学力差はみられなかったが、初級クラスについては、やはり推薦入試やスポーツ推薦入試などによって、英語を高校までほとんど履修していないと思われる学生と、ある程度基礎力をもった学生が混在していることが判明した。クラス分けにおいて、プレイスメントテストは有効ではあるが、基礎学力に大幅に欠ける学生については、テスト後、自己申告などにより、英語再入門クラスなどを初級クラスとは別に設けるべきかもしれない。

また、クラス分けに関して生じた技術的な問題点は、学生の希望する第2外国語と英語の時間割がどうしても重複するケースがみられたことであった。これも今後の解決すべき課題であろう。

成績評価については、春学期については、提案どおり、上級クラスはSとAを中心とし、Bを最低評価とした。初級クラスはB、Cを中心とし、Aを最高評価とした。その割合は厳密に設定することはしなかった。中級クラスについては、非常勤講師によりすべてのクラスが担当されているため、成績のつけ方が周知徹底できず、原則的に従来どおり各教員の判断にまかせることになった。秋学期については、提案どおり、12月に1年生全員が受験することになっているTOEICのIPテストの成績も成績評価にある程度組み入れる予定

である。成績評価については、中級クラスでは特に教員によって教える教材、教育内容がそれぞれ異なるため、現時点では客観的な成績評価は大変難しいが、できるだけ改善していくことが今後の課題である。

CALLの導入における課題

経済学部英語授業改革案(附属資料2)に基づき、2005年度よりアルク社のコンピューターを用いた自主学習システム Net Academy が愛知大学に導入された。このシステムは、全国の主要な大学(短大も含む)がほとんど導入しており、自主学習システムとしては、定評のあるものである。しかし、システムの納期や設置が遅れたために、豊橋キャンパスでは、2005年度秋学期より使用可能となった。アルク社のスタッフにより学生の利用に先駆けて、英語教員を対象にデモンストレーションが行われた。主に、リスニングとリーディング力を強化するコースが用意されており、愛知大学では、自己診断テストを受けてから自分の能力にあった多彩な学習コースが選べるスタンダードコースと、TOEICの演習問題が多く用意されている初級・中級コースの両方を導入した。

この自主学習システムの目玉としては、リスニング、リーディングともにスピード変換システムがついていることであろう。リスニングにおいては、最大5段階のスピードで各自のペースに合わせて何度でも聞きなおすことができる。リーディングにおいても、ネイティブスピーカーの読み方とされるセンス・グループに合わせたスラッシュ・リーディングとよばれる読み方を各自の読解スピードに合わせて練習することができる。自分の読解スピードがWPM (words per minute) で具体的に示され、目標のスピードを自由に設定できるところが最大の利点である。また、リスニング、リーディングコースともに、学習者独自の単語帳も登録することができるのも利点の一つであろう。

この便利な自主学習システムも今後の利用にあたって、課題がいくつかある。第一に、このシステムは原則的に学内のパソコンからしか利用できないことである。学内でこのシステムが利用できる教室は決して多くなく、また同時に70人までしかアクセスできないことが最大の欠点である。この点は、明治大学商学部などが実践しているように、学外からも学生がアクセスできるようなシステム作りを早急に整える必要があるだろう。

第二に、このような自主学習システムは、英語の授業の一部に組み入れるか、あるいは教員が実際に教室で使い方をデモンストレーションしてみせる必要があるということである。このシステムは、基本的には自主学習のためにつくられたものなので、実際の授業に代えることはできないが、全学生を対象に少なくとも実際の使い方を教員あるいは専門のスタッフが紹介し、体験させる必要がある。改革案の中でものべられているように、愛知

淑徳大学では、このシステムの利用率はわずか1パーセントにすぎないという。この利用率を引き上げるためには、語学教育研究室による広報活動も含め、英語の授業の中で教員(非常勤講師も含め)がこのシステムの長所を学生に積極的に体験させる必要がある。

まとめと今後の課題

習熟度別クラス編成は、教員側からすると、教えやすいことは事実である。従来は、レベルの異なる学生が集まったクラスでは、教員は難しすぎず、易しすぎずの授業を展開せざるをえず、結果としてクラスの平均学力に合わせた授業を余儀なくされていた。これでは、上位の学生や下位の学生にとっては得るものが少なくして当然であろう。習熟度別クラスを不平等だと批判する向きもあろうが、実は今までのほうが学生にとってもっと不平等であったのではないだろうか。上位の学生の学力をさらに伸ばし、基礎学力に欠ける学生はハードルを低く設定してやることにより、達成度を実感させてやるのが今後の英語授業のありかたではないだろうか。

習熟度別クラスにおいては、学生の学力がある程度等質になることから、教員は確実に教えやすくなることは間違いないが、一方で従来のクラスで観察された、下位の学生が上位の学生に刺激を受けて勉強する、あるいは、上位の学生が下位の学生に指導をするなどの長所もある程度失われることも事実であろう。この点は更に今後検証していく必要がある。

今後の課題として最大の問題点は、やはり成績評価についてであろう。現時点では、上級クラスと初級クラスでは、専任教員が担当しているため、統一教材を用い、教育内容もほぼ統一しているが、非常勤講師に依存している中級クラスにおいては、必ずしも教育内容が統一されているとはいえない。全教員が共通のテキストを用い、統一試験を行えば、客観的な成績評価が可能となるであろうが、非常勤講師の先生方全員に統一テキストなどを強要することは現時点では非常に困難である。このため、今後の課題としては、テキストなどを本学の教育方針と合致したものをある程度選定し、その中から選んでもらう、などのやり方も考慮しなければならないであろう。実際に、成績評価にTOEICなどのテストの成績を用いる大学も増えているが(三重大学などはTOEICのスコアの一定基準を満たしていれば、必修科目としての英語授業の受講がすべて免除される)、全面的にTOEICなどのスコアが受講免除の条件となりうるのかは今後さらに検討していかなければならないであろう。こうしたテストの成績をどの程度大学の授業の成績評価に組み込むかは、現在大学によってさまざまである。

今年度スタートしたばかりの習熟度別クラス編成であるが、2年次以降、どの程度クラ

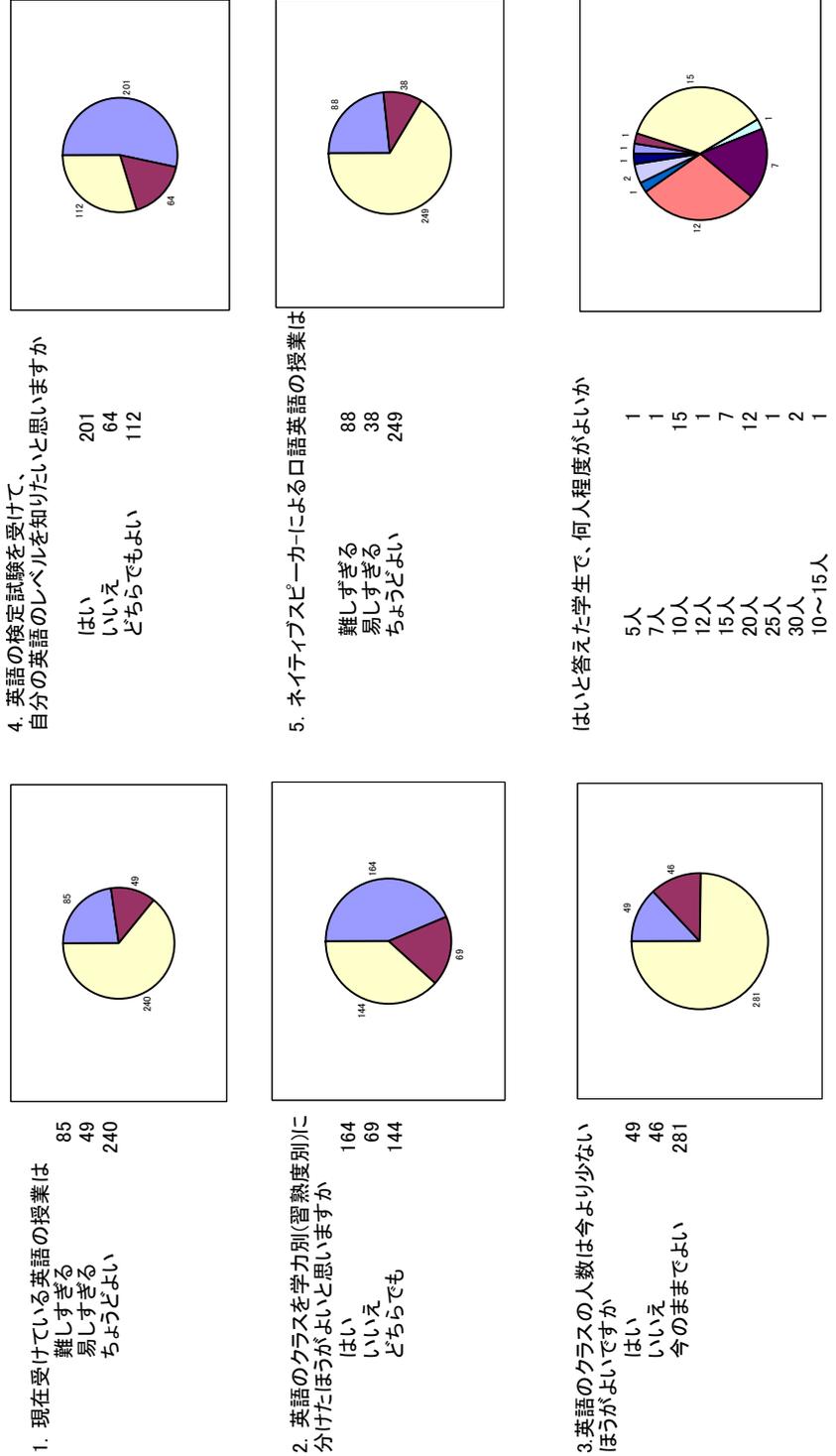
ス間の移動が行われるのか、時間割を第2外国語や専門教育科目と重複せずに編成することが可能なのか、等等問題点も山積している。毎年の見直しや検討が必要である。

参 考 文 献

- 杉森幹彦 「英語統一テスト・習熟度別クラス編成・到達目標の設定および測定に関する実態調査の報告」
立命館大学政策科学紀要 10-3, Mar. 2003.
- 中鉢恵一 「外国語の衰退と英語帝国主義—大学における外国語教育の実態とその行方—」東洋大学人間
科学総合研究所紀要 第2号 (2004) 71-80
- 樋口忠彦・新田香織・吉田幸治 「TOEICの活用と習熟度別クラス」英語教育 2004年7月号 25-27 大
修館

資料 1

英語授業に関するアンケート



資料2

経済学部英語授業の改善の提案

—習熟度別クラス編成の2005年度実施とCALL導入にむけて—

グローバリゼーションとIT革命により、日本人のネットワークは急速に広がり、新たな形での「対話」が可能であり必要となってきた。そのため、情報技術を使いこなす能力と同時に英語の運用能力をつける必要がある。「対話」の相手は英米の英語を母国語とする人々には限らず、英語を第2言語または外国語として使用する世界の人々である。むしろ、21世紀においては後者の数のほうが前者よりも圧倒的に多い。21世紀を生きる学生にとってこのような「対話」のための道具をもつことは不可欠である。

しかしながら、日本においてはそれを支える教育的政策がとられていない。1例をあげると、日本の英語授業時間数は圧倒的に少ないのが現状である。1997年の日本の中学校における年間時間数は117時間である。これに対して、自国語を非常に大切にフランスですら173時間も英語を勉強している。フランス語が英語と同じ印欧語族の言語であることも考慮に入れるならば、日本の中学ではフランスの半分の時間しか英語を勉強していないことになる。

愛知大学経済学部生が世界とつながり世界に参画するために英語運用能力を高めることができるように可能な限りの英語授業改善を進めなければならない。ここでいう英語運用能力とは、識字能力(global literacy)と伝達能力(global communication)を指す。この両者の能力をバランスよく伸ばすことが必要である。しかし、これまでほとんど無視されてきたglobal communicationの重要性を強く主張したい。なかでもアジアにおいて英語を第2言語または外国語として使用する人々とのコミュニケーションは、日本がアジアでこれから果たす役割の大きさなどを考えると、きわめて重要である。

そこで、2005年度より習熟度別クラス編成の導入を提案したい。しかし、クラスを習熟度別に編成したからといって、それだけで教育成果があがるというものではない。この意味で、習熟度別クラス編成は英語授業改革の1段階に過ぎない。これと平行して考えなければならないことは多い。各レベルにおけるクラスの授業内容、テキストのあり方、4技能との関係、コンピューターを利用した英語自主学習システム(CALL)の確立、カリキュラムにおける英語関連科目とのかかわりなどである。特に、英語力が伸びた学生を次の段階に進められるように、他科目(英語に限らず)との関連をより明確にする必要がある。このため、改革はより発展性のある形で行い、学生に解るように提示しなければその実効は得られない。

愛知大学経済学部英語授業の改善

習熟度別クラス編成の提案

目的および位置づけ

- ◎ 学生の英語力習熟度に従いクラスを分けることにより、一人一人の学生により適した英語の指導を行うことを目的とする。
- ◎ 現状では英語力に大きな格差のある学生を対象とするために、多くの学生が再履修を余儀なくされている。この点を打開するためにクラスを英語習熟度に従い編成し、2006年度より再履修クラスを全廃する。

問題点と今後の展開

1. クラス分けの方法

- ・ 上級 (Advanced, 約35名 2クラス), 中級 (Intermediate, 約40名 8クラス), 初級クラス (Elementary, 約35名 2クラス) の3グレードに分け、それぞれのグレードのクラスは基本的に等質とする。
- ・ クラスの名称としては上級, 中級, 初級などを用いない。これまで通り ABCDE... などのように呼ぶ。
- ・ 1年生については4月にクラス分けのテストを行い、それによってグレードを決める。
- ・ 2年生については1年の11月に実施する学力達成度テストなどをもとにクラス分けを行い学生の到達度にあったクラスで学習させる。ただし、学生の心情や意欲も配慮し、実際の運用は慎重に行う。次の資料をもとにクラス分けを行う。
 - * 1年の11月に実施する学力達成度テスト (TOEIC利用)
 - * 上級, 初級クラスは基本的に専任教員が担当するので、その授業成績
 - * 中級クラス担当者の意見 (年度末にアンケートをとる)
- ・ 再履修者 (2年生以上) は、1, 2年の中級または初級クラスに入る。その際、同一クラスに再履修者が集中しないように配慮する。
- ・ 時間割のなかで英語の授業日と他の外国語や体育の授業日 (時に授業時間) のすみわけがうまくできるかが問題である。教務課においてシミュレーションを早急に行う。

2. 評価の仕方

- ・ 例えば、グレードにより次のような基準に従い評価する。

上		S		A		B
中	S		A		B	C
初	A		B		C	

- ・ 上級, 中級クラスでも F はもちろんありうるが, 欠席時間数の多い学生を中心とする。
- ・ 1 年生のクラス分けテストの段階で, 学生にも評価の仕方について徹底する。

3. クラス分けテストの実施時期, 採点, クラス発表の時間的流れ

- ・ 4 月 1 日午前中に英語担当者作成の独自テストを実施する。英語を履修しない学生も受験させ, 全体の英語力を把握する。
- ・ 採点およびクラス分けは時間的にかなり厳しいが, 教務課と英語担当者はもちろんのこと経済学部においてもその体制を整える。
- ・ 問題形式はマークシート方式とし, 採点はコンピューターを利用する(ソフトなどを購入する必要があるが, 情報処理センターか語学教育研究室で購入してもらう)。
- ・ クラス分けも基本的にコンピューターを利用する。
- ・ 欠席者については担当者が諸資料をもとにクラスを決定する。
- ・ クラス分けテストの全体結果は毎年教授会に報告し, 入学生の学力把握の一助とする。
- ・ 各学生には, テストの素点(100 点満点)と TOEIC 換算点を ALC Net Academy において発表する。

4. レベルに合った教授法および教材の開発

上級クラス (Advanced English Class) の教授内容

国際社会において活躍できるような高度な英語 4 技能を身につけることを目標とする。最終的には Newsweek などの雑誌が読めるように, また簡単な英語論文が書けるようにする。このために, 1 年次から受信型だけでなく発信型技能の習得につとめなければならない。科目名を変更できないので, 現行の科目名をそのままにしながら内容的には次の通りとする。

1 年口語英語 Speaking, Listening を中心とする

1 年基本英語 Reading, Writing を中心とする

2 年総合英語 Paragraph Writing を中心とする

2 年英語講読 Intensive & Extensive Reading を中心とする

具体的にそれぞれの授業やスキル養成においてどのようなことを行うか 1 つの例を示す。

- ・ 1 年口語英語においてはスピーキング力をつけるために時にはスピーチなども含める。
- ・ 1 年春学期においてはリスニング力をつけるために音読とシャドーイングを徹底的に行う。
- ・ 2 年次における英語講読の授業においては英文の内容を深く読み込むことはいうまでも

愛知大学経済学部英語授業の改善

ないが、それと平行して多読やパラグラフリーディングなどにも目を向け指導をする。

- ・ 2年間で1,000頁の英文を読破することを目標に多読 (Extensive Reading) を行う。
- ・ 1年次より英作文の学習をさせる。いわゆる和文英訳はやらない。最初は、制限を加え英文を書かせたり、例となる英文にそって書かせるなどの練習を行う。さらに、段落構成を意識し与えられたテーマにそって英語で自分の意見を述べる。2年間で6,000語 (A4で10枚程度) の英文を書き、最終的に短い論文を書く。
- ・ 上級クラスは基本的に専任教員が担当するので、できる限り統一のテキストを用いる。

中級クラス (Intermediate English Class) の教授内容

世界にアクセスできる英語運用能力として識字能力と伝達能力をつけるためには、多様な言語活動を教授者が用意する必要がある。受信型の言語活動に偏ることなく発信型の活動を十分に組み込まなければならない。

本クラスの学生は基本的な英文法事項は理解できていると考えられるが、教授者はこの点を確認しながら諸活動を行わせる。理解が不十分な場合には、もう一度文法事項に立ち返る必要もある。

現状では中級クラスの担当者の多くが非常勤講師となるため、それぞれの教授者が独自性を発揮しながら1つの方向性をもつことが望ましい。この方向性をもつために次のことを行う。

- ・ 習熟度別クラス分けの趣旨、発信型活動にも注意を向けること、TOEIC受験へ向けての取り組みなどの点を徹底する。
- ・ 語学教育研究室の外国語学習ネットワーク (下で示す) について周知徹底をはかる。
- ・ 非常勤講師の教授法や教材 (多読のための読み物など) を支援する体制を整備する。
- ・ 学生の現状や英語教育に対する意見を集約する。

[スキル別についての考え] 1年口語英語・基本英語, 2年総合英語・英語講読をそれぞれの言語スキルに分けて授業を構成することは可能であるが、中級クラスの場合にはその方式をとらない。言語スキル別の授業構成は次のような場合に有効だと考えるからである。(1) 学生の英語到達度がかなり高い場合 (2) 学生の英語学習意欲がきわめて高い場合である。残念ながら、中級クラスの学生はそれに該当しないので、むしろ授業は総合的に構成し各教授者の個性に応じ独自性を発揮しながら多様な言語活動を用意し総合的英語力を伸ばすほうが学習効率が高いと考えられる。

[テキスト統一についての考え] テキスト (特に TOEIC に重点を置くテキスト) を統一することについては今後の課題とする。テキストを統一することにより、学習内容や項目を決定できることは大きな利点であるが、テキストの統一により教師 (ほとんどが非常勤)

と学生とのあいだの動的関係が損なわれ学生の学習意欲をなくすこともある。近畿大学の習熟度別クラス編成(統一テキスト)の実践にみられるように、「個々の学生の学力や考え方を理解し、教師と学生、学生同士の人間関係を構築する」ことなくして「耐える学習」「鍛える指導」を行ってもさらに英語嫌いにさせるだけであることを肝に銘じなければならない。

初級クラス (Elementary English Class) の教授内容

本クラスにおいては英語の基礎力を身につけさせる。そのためには英文法の基礎についても学んだり、基本英文の暗唱を行ったり、辞書の引き方の指導などを行う。ただし、教材として文法問題のみを扱うのでは学生はますます英語嫌いになる可能性がある。教材の選定や授業構成には細心の注意が必要である。このため、例えば、高等学校ではほとんど行われない強勢に重点をおく音声指導や音読を組み込み単調な英文暗唱の作業をより活動的で楽しいものとする。

習熟度別クラス編成において最も留意すべき点は、下位クラスにどのような教授者を配置すべきかである。英語教育において優秀でかつ学生の心情が理解できる教師がこのクラスを担当すべきである。このクラスにおける授業の成否が習熟度別クラス編成の成否ともかかわると考えるべきである。

5. 学生の英語力把握の取り組みと各グレードの到達目標

☆ 各グレードの到達目標

学習者が何らかの到達目標を定め自宅学習に望むことは語学教育においてきわめて重要である。その目標は抽象的なものの場合もあるが、より具体的に学習者に示すほうが理解しやすい。愛知大学経済学部においては英語検定およびTOEICを利用し各習熟度クラスの到達目標を示す。

	英語検定	TOEIC
上級クラス (Advanced English Class)	準1級	650
中級クラス (Intermediate English Class)	全員2級	550
初級クラス (Elementary English Class)	目標2級	480

☆ 学力達成度テストの実施

到達目標が達成されたかを確認するためには英語達成度テスト (achievement test) を受けなければならない。就職環境も考慮に入れると経済学部としてはTOEICが適切であろう。しかし、現状で全員にTOEICを受験させることにはいくつかの大きな問題がある。

愛知大学経済学部英語授業の改善

- ・ TOEIC (Institutional Program) でも一人当たり約 2850 円かかる。
- ・ TOEIC では英語の到達度が適切に確認できない学生が多数 (60 名余) いる。

これらの問題点を克服しつつ愛知大学経済学部としては学生全員に対して TOEIC を受験させる。さらに、この結果を 2 年次の習熟度別クラス分けの一資料とする。

なお、次のように実施する。

- ・ 1 年生の秋 (11 月) に実施する。2 回を設定し、どちらかで受験させる。
- ・ 英語未履修者も受験させる。
- ・ 入学時に諸費用として TOEIC の受験料を徴収する。
- ・ 全体結果を学生のみならず教授者にも公表し、英語教育前進のための指針とする。
- ・ 個人の結果を ALC の Net Academy を通して学生に知らせる。結果入力のコストが必要となる。

☆ 学力達成度テストに向けての学習とその結果発表

以下に示すように ALC の Net Academy を利用し、学力達成度テスト (TOEIC 利用) に向けての自主学習をさせる。この英語自宅学習ソフトには 1/6 の量の TOEIC が 5 回分含まれているので、それも利用しテストの形式に慣れさせる。また、クラス分けのテスト結果および TOEIC の結果を ALC の Net Academy に入れ、学生一人一人が自分の到達度を確認しながら、英語学習の指針とする。

また、経済学部として「努力賞」(1 年秋以降の TOEIC の 150 点アップ) など検討する。これにより、3・4 年次における英語学習を促すものとなる。

6. クラス分けのためのテスト (placement test) の作成

- ・ TOEFL, TOEIC (Institutional Program) を利用することも検討したが、両試験とも採点に 1 週間余りの時間がかかり、実行は不可能と考えられる。
- ・ 独自に問題を作成する。形式は 4 択より正解を選択する問題形式とする。
- ・ 目標平均点および目標最高点を設定し、それに合わせた問題作りを試みる
- ・ テストの内容 (75 問 - 100 点 - 45 分)

	Structure	Vocabulary	TOTAL	傾斜配点
レベル 1 (英検 3 級)	10	0	10	0.9
レベル 2 (英検準 2)	20	0	20	1.1
レベル 3 (英検 2 級)	15	15	30	1.4
レベル 4 (英検準 1)	7	8	15	1.8
	52	23	75 問	100 点

- ・ 上記の点を把握するために、テスト解答用紙に英検・TOEICの級や点数を記入させる
 - ・ このテストによって英検・TOEICにおいて概ねどのレベルに位置するかを示す。
- 例えば、このテストにおいて65点取れば、英検ではだいたい2級くらいだということが解るようにする。

7. 教員による担当クラスの均等化と幅広い非常勤講師の採用

- ・ 上級クラスは英作の添削など教授者に多大の労働を課すこととなるので、専任教員が担当する。
- ・ 中級クラスは数も多いので主に非常勤講師が担当することとなる。非常勤講師の採用枠を広げ、実用的な英語を教えられる人や英米などにおける生活経験が豊かな人などを積極的に雇う。このために、公募も検討する。
- ・ 「口語英語」担当の外国人教員の選定には十分な配慮をする。現在のスタッフのなかに適切な教員がない場合には新たな採用を検討する。
- ・ 非常勤講師と個別に面談し、担当クラス決定の資料とする。
- ・ 非常勤講師との懇談会において習熟度別クラス編成の主旨を徹底する。(学部費による援助が必要)

インターネットを利用した外国語学習 (CALL) の導入によるネットワーク作り

☆ 英語自主学習のためのシステム導入の目的

愛知大学経済学部生の英語学習をより一層高め深めるためには、学生の自主学習を促進することが急務である。というのは、経済学部においては1, 2年の英語授業は決して多いわけではない。このためにはいろいろな方策が考えられる。その1つとしてコンピューターを利用した最新英語学習システム (computer assisted language learning) の導入がある。これにより語学学習を整備し、学生の動機づけとし、学生の英語力 (特に、聞く力と読む力) 向上を図りたい。CALLを利用した外国語学習は直接授業とかかわるわけではないが、実質的な意味において学生の英語運用能力を高めるためにはきわめて重要である。

従来のLL教室のように特定の場所に限定することなく、LAN回線がつながるあらゆる場所で自主学習が可能である。このため、本システム導入により語学教育研究室を中核とした学生と教師の語学学習のネットワーク作りの基礎が作られる。これを基礎として、語研における自主学習のシステムを構築することが期待される。

このため、自主学習や家庭学習が不可欠である。この拠点が語学教育研究室である。当面、5つの観点からネットワーク作りを行う。

愛知大学経済学部英語授業の改善

- ・ ALC Net Academy のシステムを利用し、クラス分けテストの成績や TOEIC 換算点などを学生一人一人に公開する。また、語学教育研究室の語研ニュースなどを利用し、習熟度別クラス編成の主旨を徹底する。
- ・ 学生が利用できるように多種多様な多読教材（英語読み物）を語学教育研究室に所蔵する必要がある。すでに 200 余の Extensive Reading 用教材が備えられているが経済学部全体の利用を考えると決して充分とはいえない。また、それらの紹介や時には学生の感想などを語研ホームページを利用して公開する。
- ・ 学生の英語による作品を語学センターを通して世界に発信する体制を構築する。
- ・ 語学教育研究室にて英語学習におけるカウンセリングを行う。簡単な英語の質問にも答えられるようなシステムを作る。
- ・ 留学指導体制を確立（短期および長期）し、一人でも多くの経済学部生が海外において英語を学べるようにする。

☆ 自主学习教材としてアルク社ネットアカデミーを導入

本システムを導入する理由は次の通りである。

- ・ アルク社ネットアカデミーには 8 コースが揃っているので、今後の展開ができる。これにより、短大から国際コミュニケーション学部の学生まで幅広く利用できる。
- ・ 買い取り方式なので、初年度以降の費用は保守費用（約 15 万円）のみで済む。
- ・ 企業への就職には TOEIC テストのスコアが必須となりつつある。これに対応できるようにアルク社の教材は完全に TOEIC に対応している。
- ・ アルク社はヒヤリングマラソンなどこれまでも英語教材の開発を手掛けてきているので、実績があると考えられる。
- ・ 多くの大学が既に導入していて、ほとんど問題はない。

☆ ALC NetAcademy 「初級・中級者のための TOEIC スコアアップコース」の内容

本システムでは、学生に英語力の現状を認識させ、自己学習の動機づけと学習指針を提供する。特に授業では強化しにくいリスニングなどの面を本コースによって補うことができる。「初級・中級者のための TOEIC スコアアップコース」は TOEIC 500 点を目指すコースで幅広い学生が利用できる。静岡大学、関西大学、近畿大学はアルク社の本コースのみを導入しているため、最初の導入としては本コースが適切だと考えられる。具体的には次の内容である。

- ・ リスニング強化コース（50 ユニット）→スピード変換機能がついている
- ・ リーディング強化コース（50 ユニット）→フレーズ単位で表示など工夫がある

- ・ 中間テスト (TOEIC テスト形式 100 問) →実力が把握できる
- ・ 修了テスト (TOEIC テスト形式 100 問) →実力が把握できる
- ・ TOEIC テスト演習コース (200 問) →弱点問題を自動検索し繰り返し問題を演習することができる

☆ アルク社ネットアカデミーのシステムを授業に利用している実践も多くみかけるが、基本的に自主学習の教材である。しかし、すでに実践されているように、授業においても利用できる。ただし、これを授業に替えることはできない。このため、一年の春学期には授業の一部として本コースのなかのユニットを必ず利用させることにより、利用のきっかけを作る必要がある。専任教員の授業では必ず一度はこのシステムを体験させる。また、非常勤講師にもその利用を呼びかける。

アルク社ネットアカデミーは TOEIC テストと対応し、初中級者コースには実際のテストの 5 分の 1 (40 問) テストが組み込まれている。これによって TOEIC テストによる学生の英語力測定が可能となる。1 年の春学期に多くの学生にこの 5 分の 1 テストを受けさせ、本学経済学部が実施しているプレイズメントテストとの相関関係を追調査することが望ましい。

☆ システムを導入すれば、学生が利用するというものではない。愛知淑徳大学の実績では全学生のわずか 1 パーセントが常時利用する学生である。これを 2～3 パーセントの水準にまで引き上げたい。このためには語学教育研究室をはじめとしたところでの広報活動が必要である。また、英語担当者が積極的に授業に利用し、学生利用への導入としなければならない。

学生がこのシステムを利用して学習できる環境を整える必要がある。現状では本学情報処理センターの教室は満杯に近い状態なので、よりよい環境を情報処理センターに望みたい。同時に、語学教育研究室はこれまで以上に情報処理センターと緊密に連絡を取りながら CALL, e-learning の実効をあげなければならない。